

トンブクトウという西アフリカの都市がある。現在はマリ共和国に属するが、サヘルと呼ばれる大西洋から紅海に至るサハラ砂漠南縁に位置する。そこはアフリカ・イスラム世界の宗教文化の中心地でもあった。

本書は、12世紀以来の金箔をほどこしたコーランやイスラム法学の研究書など、トンブクトウの文化遺産を守った敬虔なイスラム知識人の努力の物語である。

先祖代々エジプトやスーダンから持ち帰ってきた貴重な古文書を保管していたアデル・カデル・ハイダラは、どれほどの値段がつくか分からない古史料を集め続けていた。隣国との国境に近い村に貴重な古文書があると聞けば4週間も費やした労苦の結果、1万ドル相当の膨大な食料と織物を代償に引き取った。ハイダラにあるのは、先祖代々の家学への責任感と知識

アルカイダから古文書を守った図書館員

ジョシュア・ハマー著



アルカイダから古文書を守った図書館員

The Bad-Ass Librarians of Timbuktu And How They Fought to Save the World's Most Precious Manuscripts
Joshua Hammer
ジョシュア・ハマー
梶山あゆみ訳

紀伊国屋書店

原題=THE BAD-ASS LIBRARIANS OF TIMBUKTU
(梶山あゆみ訳、紀伊国屋書店・2100円)
▼著者は米国のジャーナリスト。

敬虔なイスラム知識人の勇気

の探求心に他ならない。

彼のおかげでトンブクトウは陰鬱な僻地ではなく、ユネスコはもとより研究者や外交官さらに観光客まで誘致するイスラム文化の拠点になった。だが、この土地に武装したイスラム過激派が進出してきた。なにしろ、アルジェリアのために働いていた日本人たちを平気で殺したテロリストたちであ

る。マリやサヘル歴史遺産を破壊し続けるくらいは平気なのだ。

ハイダラは古史料を安全な首都バマコに移すために必死の覚悟で働く。苦心惨憺、アルカイダはじめ、マリ軍の検閲やフランス軍の攻撃から数十万点の古文書を守りきった。精緻なデジタルカタログをつくり、ぼろぼろの紙を奥深い遺産に仕立てあげた。カビのつい

た本を絶滅から保護したのだから、間違いなく世界でも有数の文化功労者である。

いまではバマコのビルの高層階に除湿装置のある保管所を造って保存されているので、文書の先行きにはさほどの心配はない。とにかくスリルに富むのは、トンブクトウから1000キロ離れたバマコまでテロリストの目をかいくぐって運んだ勇気と冒険の数々である。日本人にはなじみの少ないサハラ以南のイスラムの歴史と現在を知る上でも格好の良書である。巻頭のアラビア語写本とトンブクトウの街並みの美しさに魅入られる人も多いだろう。

【評】明治大学特任教授

山内 昌之

読 書